

成人のアタッチメントと防衛機制に関する研究の概観

—心理臨床への寄与可能性を検討する観点から—

教育心理学コース 塚 越 菜緒子

A Review of the Relationship between Adult Attachment and Defense Mechanisms:
Implications for Clinical Practice

Naoko TSUKAKOSHI

Both attachment styles and defense mechanisms are derived from childhood experiences, and for adults, they affect one's strategies to handle his/her unpleasant emotions or interpersonal conflicts. They are considered as clinically useful concepts, but relatively few empirical research studies are conducted which include both scales. In this paper, previous research studies are reviewed, and some issues and future directions are also discussed in the final section.

目 次

- 1 本論文の目的
- 2 一般的な傾向に関する研究
 - A 全般的な相関の研究
 - B 特定の防衛機制に注目した研究
- 3 精神病理や心理実践と関わりの深い研究
 - A 精神病理や特定の心理傾向との関連を検討した研究
 - B 心理療法による変化の指標として扱った研究
- 4 まとめと今後の展望

1 本論文の目的

本論文では成人のアタッチメントと防衛機制の関連に関する先行研究を概観し、臨床実践への寄与の可能性について検討する。アタッチメントと防衛機制は発達メカニズムに類似性がうかがわれ、いずれもパーソナリティや対人葛藤処理に関わる概念である。

Bowlby (1969/1982) のアタッチメント理論によれば、人は不安や恐れのようなネガティブ情動を喚起されると、特定他者との近接を維持することで安心感を得ようとする。Main & Goldwyn (1994) によるAAIや、Bartholomew & Holowitz (1991) らのRQなど自己報告式尺度の開発により、成人を対象とした研究も数多くなされている。近年は臨床領域でも注目され、総じてアタッチメント安定型に比して不安定型は様々な精神病理や問題行動に繋がると明らかにされている (レ

ビューとして Dozier, Stovall, & Albus, 1999)。

防衛機制もまた、幼少期の重要な対象との関係性に影響を受けた情動処理戦略と考えられている。ストレッサーに対処して内的安定を保つための心理的メカニズムであり (Vaillant, 1994)、水準の高い防衛の使用が適応を上げる一方、水準の低い防衛の使用が不適応や困難をもたらすとされる。ただし水準や防衛の分け方には様々な提案がなされ、統一されていない (例えば Perry & Bond, 2012; Vaillant, 1992)。また測定方法も観察者評価法や質問紙尺度、投影法など多様であり、中西 (1999) はレビューの中で各方法の特徴や限界の検討が不足していると指摘する。こうした曖昧さも影響しているのか、防衛機制を扱った実証的研究は全体に少数である。一方で理論や実践をベースに、防衛スタイルとパーソナリティ病理や治療介入アプローチの関連を考察する研究が見られ (池田, 2008; 神谷, 2006; Weinberger, 1998)、臨床的有用性の高い概念と考えられる。

以下、まずアタッチメントと防衛機制の両者を扱った先行研究をレビューし、課題と今後の展望について述べる。

2 一般的な傾向に関する研究

A 全般的な相関の研究

アタッチメントと防衛スタイルの全般的な関連を検討した研究としては、Prunas, Di Pierro, Huemer, &

Tagini (2019) が大学生を対象に自己記入尺度を用いてアタッチメントスタイル、防衛スタイル、親の養育態度を測定している。その結果、未熟な防衛が不安定なアタッチメントの全ての側面と関連した一方、成熟した防衛は安定したアタッチメントのみを予測した。さらにアタッチメントの回避的な側面は分裂や抑圧を特徴としたが、不安的な側面は投影や空想と関連を示し、それぞれ異なる防衛との繋がりが示唆された。

日本では蓮花 (2008) が青年期と成人期を対象に質問紙調査を行っている。アタッチメントスタイルの測定には ECR-GO 日本語版 (中尾・加藤, 2004)、防衛スタイルの測定には日本語版 DSQ42 (中西, 1998) が使用された。青年期では、見捨てられ不安が未熟な防衛および神経症的な防衛と正の相関を示し、成熟した防衛とは負の相関を示した。一方、親密性の回避は未熟な防衛とのみ正の相関を示した。成人期も概ね同様の傾向が見られ、2つの次元により多少の違いはあるが、アタッチメントが不安定であるほど成熟度の低い防衛スタイルを持つと示唆された。ただし本研究は大学生とその母親に対して行われたため、特に成人期が女性のみである点には考慮が必要であろう。

B 特定の防衛機制に注目した研究

未熟な防衛の一つとされる投影に関しては Mikulincer & Horesh (1999) が大学生を対象に、自己報告によるアタッチメントスタイルと、自己および他者に関する記述との関連を検討している。この研究において、不安アンビバレント型の人々は自己をそのまま他者に投影する一方、回避型の人々は自己の望まない側面を投影することが示された (Mikulincer & Horesh, 1999)。同様の結果は職場の上司を対象とした研究でも認められ、不安定なアタッチメントスタイルは部下へのネガティブな見方に繋がり、特に回避傾向の高い上司は有能性の低さを部下に投影していた (Thompson, Glasø, & Matthiesen, 2018)。Thompson et al. (2018) は、特に回避型のアタッチメントについて、過去と現在の対象の類似性から生じるスキーマ転移プロセスと、防衛機制と不快な内的状態の相互作用から生じる防衛的投影という複数のルートを通じて対人関係に影響することを指摘している。

同じく未熟な防衛機制とされる分裂については、大学生を対象に RQ、分裂尺度、両親の養育態度尺度の関連が検討されている (Lopez, Fuendeling, Thomas, & Sagula, 1997)。Lopez et al. (1997) によれば、高ストレス状態にある不安定型アタッチメントスタイルの人

たちに分裂の使用が多く見られた。

理論的には、軽視/回避型と無意識的な抑圧もしくは意識的な抑制の使用の関連が推察されている。それに関し、直接的には防衛を測定していないが、記憶の認知プロセス的な観点から検討した研究が見られる。Fraleigh, Garner, & Shaver (2000) は回避傾向の高い人がアタッチメントに関するインタビュー内容をどれくらい記憶できるかを実験した。その結果、直後の再生量が少なく、忘却率は回避傾向の低い人と同程度であったことから、最初の符号化の段階で防衛が働いていると結論付けている。一方 Pietromonaco & Barrett (1997) による日常的な対人交流に関する実験では、回避型も対人交流の直後は他の不安定型と同程度の否定的感情を報告するが、時間において回顧すると否定的な経験は思い出せないことが示され、エピソード直後には抑制が働かない可能性が示唆されている。

3 精神病理や心理実践と関わりの深い研究

A 精神病理や特定の心理傾向との関連を検討した研究

気分変動症もしくは大うつ病の臨床群を対象に、AAI によるアタッチメントスタイルおよび内省機能の測定と、同じトランスクリプトを使って Defense Mechanism Rating Scales-Q-Sort (Di Giuseppe, Perry, Petaglia, Janzen, & Lingiarde, 2014) という観察者評価法による防衛機制の検討が行われている (Tanzilli, Di Giuseppe, Giovanardi, Boldrini, Caviglia, Conversano, & Lingiarde, 2021)。結果は理論的に予測された通り、安定型は不安定型よりも内省機能が高く、より適応的な防衛機能を示した。特に安定型で内省機能の高い人は連携や打ち消しといった水準の高い防衛を使用した。不安定型は内省機能の低さと関連して投影や自己イメージの分裂や行動化の使用が見られた。さらに内省機能の高さは自己観察、自己主張、抑制という成熟した防衛と関連を示した。ただし Tanzilli et al. (2021) の研究は参加者が28名と少数であり、安定と不安定の2分類で分析されたが、今後さらに4分類での研究が望まれる。なぜなら、うつとアタッチメントについては総じてとらわれ型/不安アンビバレント型との関連が指摘されるが (Rholes & Simpson, 2004)、うつ病には他者重視の関係性を持つ人、目標重視の人、パーソナリティ病理や性格特性である人という3タイプが提案されており (Arieti & Bemporad, 1980)、異なるアタッチメントスタイルと防衛スタイルの組み合わせによる組織化が見られる可能性も考えられる。

パーソナリティ障害に関しては、主に境界性パーソナリティ障害や反社会性パーソナリティ障害について、アタッチメントおよび未熟な防衛に言及する研究が見られる（例えばLeichsenring, Kunst, & Hoyer, 2003）。しかし多くは対象関係やパーソナリティ構造の質問紙尺度の下位尺度によりアタッチメントや未熟な防衛を測っており、Bowlbyの理論を的確に反映しているとの解釈には検討の余地があるだろう。またGacono & Meloy (1992) はロールシャッハ・テストで反社会性パーソナリティ障害のうち精神病質を伴う群と伴わない群の比較を行い、精神病質的な群は不安やアタッチメントが見られず、病理的なナルシズムと境界的パーソナリティ構造を有することを明らかにしている。さらに両群に共通して、価値下げと広範な否認という防衛が見られる一方、人に対する理想化と高水準の否認の欠如が指摘されている（Gacono & Meloy, 1992）。ただし投影法による測定にも信頼性と妥当性の問題がつかまとう（中西, 1999）。質問紙や観察者評価尺度など他の方法と組み合わせると、批判に対する一定の説得力を示せるかもしれない。またアタッチメントを直接的には測定していないが、一般大学生を質問紙得点に基づいて境界的パーソナリティ構造傾向の高い群と低い群に分け、アタッチメントを刺激する手続きをとり、観察者評価によりメタ認知および防衛行動を比較する実験が行われている（Jańczak, Soroko, & Górska, 2022）。境界的パーソナリティ構造傾向の低い群も高い群も低いメタ認知を示したが、防衛行動の効果を除くと、傾向の高い群の方が有意に低いメタ認知を示した。Jańczak et al. (2022) は防衛行動が境界的パーソナリティ構造のメタ認知の測定に干渉する可能性を指摘している。

摂食障害においては、アタッチメントと関わりの深い親の養育態度に関する質問紙尺度を用いた研究が行われ、拒食症と過食症いずれも原初的な防衛と関連すること、また親の共感の失敗は原初的な防衛への依存を促進させ、過保護な親は成熟した防衛の発達を阻害することが示唆されている（Steiger, Van der Feen, Goldstein, & Leichner, 1989）。直接アタッチメント尺度と防衛機制尺度の両方を用いた研究はまだ行われていないようである。

精神疾患ではないが心理的困難を生じうる心理特性として、自身の感情に気づきにくく感情の言語化が難しいアレキシサイミア（Sifneos, 1973）がある。一般大学生を対象に行われた質問紙調査によれば、アレキシサイミア傾向の高い人ほど回避型の傾向が高く、ま

た未熟な水準の防衛を使用する（津山・中村, 2011）。アレキシサイミアの実証的研究に関するレビューの中でも、未熟な防衛の使用と不安定なアタッチメントスタイルは重要な特徴として指摘されている（Tylor & Bagby, 2013）。

さらに、いずれも非臨床群に対する質問紙調査により、ホモフォビア的態度と恐れ型アタッチメントスタイル、未熟な防衛の使用、精神病傾向との関連や（Ciocca, Tuziak, Limoncin, Mollaioli, Capuano, Martini, Carosa, Fisher, Maggi, Niolu, Siracusano, Lenzi, & Jannini, 2015）、心理的苦痛には恐れ型ととらわれ型アタッチメントスタイルが影響し、その関連は未熟な防衛と神経症水準の防衛により媒介されること（Ciocca, Rossi, Collazzoni, Gorea, Vallaj, Stratta, Longo, Limoncin, Mollaioli, Gibertoni, Santarneckchi, Pacitti, Niolu, Siracusano, Jannini, & Di Lorenzo, 2020）が指摘されている。日本でも岡田・桂田（2013）が自己報告式尺度を用いて、大学生の不安定な愛着スタイルと攻撃性の高さおよび未熟な防衛の使用が概ね関連することを明らかにしている。

なお自殺（Lewis, 2018）やPTSD（Schottenbauer, Glass, Arnkoff, & Gray, 2008）に関するレビュー論文においても、アタッチメントと防衛機制は別個に重要な要素として挙げられている。しかしまだ一つの研究内で同時には扱われていないようである。

B 心理療法による変化の指標として扱った研究

臨床実践と直接的に関連する研究として、まだ萌芽的だが、心理療法によるアタッチメントと防衛機制の変化を測定しようとするものが見られる。

うつ病性障害もしくは不安障害の患者を対象に行われた長期精神力動的療法（LTPP）の効果研究では、いずれも自己記入式の尺度で測定された抑うつ、アタッチメントスタイル、防衛機制、アレキシサイミアが有意な改善を示している（Khademi, Hajiahmadi, & Faramarzi, 2019）。

観察者評価による測定も試みられている。Békés, Aafjes-van Doorn, Spina, Talia, Starrs, & Perry (2021) は、うつ病患者との心理面接のトランスクリプトをTalia, Miller-Bottome, & Daniel (2017) が開発したPatient Attachment Coding System (PACS) とDefense Mechanism Rating Scales (DMRS; Perry, 1990) を用いて分析している。その結果、治療初期においては抵抗型（AAIのとらわれ型に相当）が全般的な防衛機能の高さを示すこと、また治療初期の成熟度の低い防衛の使用が治療後

期の回避型を予測することが示された (Békés et al., 2021)。理論との合致が部分的にとどまった要因として Békés et al. (2021) は、アタッチメントに関わる話題が治療初期には扱われにくいこと、初期と後期の各 1 回ずつのセッションのみが分析対象であったこと、RCT 研究の一環であり 3 つの療法 (認知行動療法, 支持的心理療法, 精神力動的療法) が含まれていたことを挙げている。心理面接はセッションごとに扱われる内容やクライアントの状態が多少異なる様相を呈するものであり、目的や頻度など、療法による違いの影響は大きいと思われる。クライアントの負担や、評価尺度のトレーニングを受けたコーダーの必要性など、研究を行うにあたり現実的なハードルは高いが、より統制された条件下での検討が望まれる。治療の流れや効果を予測する上で有意義な知見が得られるであろう。

さらに境界性パーソナリティ障害を対象とした転移焦点化精神療法 (TFP) に関して、AAI の語りをもとに、グラウンデッド・セオリーと主題分析を組み合わせた質的検討が行われている (Tmej, Fischer-Kern, Doering, Hörz-Sagstetter, Rentrop, & Bucheim, 2021)。Tmej et al. (2021) によれば、安定型へと変化した人々には、とらわれ型からとらわれ型寄りの安定型に至る経路と、軽視型から軽視型寄りの安定型に至る経路、もしくは軽視型からとらわれ型寄りの安定型に至る経路が見られた。その背景として、治療により理想化や分裂による防衛が低減したためと考察されている。

また Keefe & Derubeis (2019) はパーソナリティ障害の心理療法による変化に関するナラティブ・レビューの中で、症状と機能の改善に先行して防衛機制の成熟が見られること、アタッチメントやメンタライゼーションの変化についてはいくつかのアウトカムと関連するが媒介は確立されていないことを指摘している。治療で介入すべき要素と、付随的なものとして理解すべき要素を分けて考える視点を提供する示唆と言える。

4 まとめと今後の展望

本稿では臨床実践への寄与の可能性を模索するため、アタッチメントと防衛機制に関する先行研究を概観した。

大枠として、アタッチメントスタイルと防衛機制の関連を直接的に検討した研究と、精神病理や治療効果をテーマとする中で扱っている研究に分けられた。前者においては、概ね不安定なアタッチメントの人ほど

未熟な防衛を使用することが示された。後者においては、不安定なアタッチメントと未熟な防衛が独立に病的傾向と関連する可能性とともに、アタッチメントと精神的健康との関連には防衛機制が媒介効果を持つ可能性が示唆された。

以上より、安定型と不安定型という 2 分類で見れば、不安定型と未熟な防衛が関連するという理論的予測と合致する結果が得られているようである。アタッチメントスタイルの区分が測定尺度により異なることや、防衛機制の区分と測定尺度の妥当性の問題もあり、3 分類や 4 分類のアタッチメントスタイルと個々の防衛との関連については更なる精査が必要と思われる。一方、媒介効果に関する示唆は重要な知見と考えられる。臨床現場での細やかな見立てと介入に繋がるのみならず、成人のアタッチメントスタイルと防衛スタイルの発達過程に新たな理解をもたらすかもしれない。手法や条件を統制し、研究を積み重ねていくことが望まれる。

最後に、本論文からは以下の展望が考えられた。

まず現時点では一部の精神疾患や心理特性との関連にとどまっており、今後は対象を広げていく方向性が考えられる。例えば境界性や反社会性以外のパーソナリティ障害、双極性障害、アルコール依存など物質関連障害、身体化に関わる障害などが挙げられる。同一疾患内に異なるパーソナリティ構造を持つサブグループが示されれば、クライアントに合わせた柔軟な治療の導入が可能になるかもしれない。

二点目として、特に防衛機制に関し、中西 (1999) も指摘する通り、測定方法による測定内容の違いを精査していくことが必要であろう。アタッチメント同様、防衛も無意識的なプロセスと意識的なプロセスを含むと考えられる。自己報告式尺度と観察者評価などの客観的測定法の違いは注目されるべき点である。

三点目として、現状、大学生らに行われたアナログ的研究と臨床群に行われた研究が並列に扱われる傾向が見られる。同様のものと見なして良いかという判断には慎重さが必要であろう。ただし非臨床群を対象とした研究はデータが得られやすく、臨床群とのスペクトラムの存在も考えると、その意義は否定されるものではない。例えば質問紙によるカットオフ・ポイントで区別するだけではなく、インタビューなど補助的調査を組み合わせることで適切な調査対象の選択に繋がるかもしれない。

四点目として、日本における臨床実践に関わるような実証的アタッチメント研究および防衛機制に関する

研究はわずかである。使用可能な測定方法が限られている影響もあると思われるが、欧米圏を中心に行われた研究結果が日本人には同じように当てはまらない可能性もある。今後は日本人についても研究を行い、知見を積み重ねていくことが望まれる。

引用文献

- Arieti, S., & Bemporad, J. R. (1980). The psychological organization of depression. *The American Journal of Psychiatry*, 137, 1360-1365.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: a test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Békés, V., Aafjes-van Doorn, K., Spina, D., Talia, A., Starrs, C. J., & Perry, J. C. (2021). The Relationship between Defense Mechanisms and Attachment as Measured by Observer-Rated Methods in a Sample of Depressed Patients: A Pilot Study. *Frontiers in Psychology*, 12, 648503.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss Vol.1: Attachment*. New York: Basic Books. (revised edition 1982).
- Ciocca, G., Rossi, R., Collazoni, A., Gorea, F., Vallaj, B., Stratta, P., Longo, L., Limoncin, E., Mollaioli, D., Gibertoni, D., Santarrecchi, E., Pacitti, F., Niolu, C., Siracusano, A., Jannini, E. A., & Di Lorenzo, G. (2020). The impact of attachment styles and defense mechanisms on psychological distress in a non-clinical young adult sample: A path analysis. *Journal of affective disorders*, 273, 384-390.
- Ciocca, G., Tuziak, B., Limoncin, E., Mollaioli, D., Capuano, N., Martini, A., Carosa, E., Fisher, A. D., Maggi, M., Niolu, C., Siracusano, A., Lenzi, A., & Jannini, E. A. (2015). Psychoticism, immature defense mechanisms and a fearful attachment style are associated with a higher homophobic attitude. *Journal of sexual medicine*, 12, 1953-1960.
- Di Giuseppe, M., Perry, J. C., Petraglia, J., Janzen, J., & Lingiarde, V. (2014). Development of a Q-sort version of the defense mechanisms rating scales (DMRS-Q) for clinical use. *Journal of Clinical Psychology*, 70, 452-465.
- Dozier, M., Stovall, K. C., & Albus, K. E. (1999). Attachment and psychopathology in adulthood. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (pp.497-519). New York: Guilford Press.
- Fraley, R. C., Garner, J. P., & Shaver, P. R. (2000). Adult attachment and the defensive regulation of attention and memory: Examining the role of preemptive and postemptive defensive processes. *Journal of personality and social psychology*, 79, 816-826.
- Gacono, C. B. & Meloy, J. R. (1992). The rorschach and the DSM-III-R antisocial personality: A tribute to robert lindner. *Journal of clinical psychology*, 48, 393-406.
- 池田政俊 (2008). 心理臨床におけるパーソナリティの見立て 帝京大学心理学紀要, 12, 33-50.
- Jańczak, M. O., Soroko, E., & Górska, D. (2022). Metacognition and defensive activity in response to relational-emotional stimuli in borderline personality organization. *Journal of psychotherapy integration* [Preprint], August 2022. doi:10.1037/int0000286
- 神谷栄治 (2006). パーソナリティ・アセスメントにおける防衛機制の再検討 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 6(1), 5-11.
- Keefe, J. R., & Derubeis, R. J. (2019). Changing character: A narrative review of personality change in psychotherapies for personality disorder. *Psychotherapy Research*, 29(6), 752-769.
- Khademi, M., Hajiahmadi, M., & Faramarzi, M. (2019). The role of long-term psychodynamic psychotherapy in improving attachment patterns, defense styles, and alexithymia in patients with depressive/anxiety disorders. *Trends in Psychiatry and Psychotherapy*, 41(1), 43-50.
- Leichsenring, F., Kunst, H., & Hoyer, J. (2003). Borderline personality organization in violent offenders: Correlations of identity diffusion and primitive defense mechanisms with antisocial features, neuroticism, and interpersonal problems. *Bulletin of the menninger clinic*, 67, 314-327.
- Lewis, K. C. (2018). The treacherous path: Developmental psychopathology and the evolution of risk for suicide. *Psychoanalytic study of the child*, 71, 5-19.
- Lopez, F. G., Fuendeling, J., Thomas, K., & Sagula, D. (1997). An attachment-theoretical perspective on the use of splitting defences. *Counselling Psychology Quarterly*, 10(4), 461-472.
- Main, M., & Goldwyn, R. (1984). *Adult attachment scoring and classification system*. Unpublished manuscript, University of California at Berkeley.
- Mikulincer, M., & Horesh, N. (1999). Adult attachment style and the perception of others. *Journal of personality and social psychology*, 76(6), 1022-1034.
- 中西公一郎 (1998). The Defense Style Questionnaire日本語版 (DSQ42) —日本での防衛機制研究のために— 社会学研究科紀要, 47, 27-33.
- 中西公一郎 (1999). 防衛機制の概念と測定 心理学評論, 42(3), 261-271.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 岡田博名・桂田恵美子 (2013). なぜ人は攻撃するのか: 攻撃性と愛着スタイル及び防衛機制との関連. 関西学院大学心理科学研究, 39, 37-42.
- Perry, J. C. (1990). *Defense Mechanism Rating Scales (DMRS)*. 5th Edn. Cambridge, MA: Cambridge Hospital.
- Perry, J. C., & Bond, M. (2012). Change in defense mechanisms during long-term dynamic psychotherapy and five-year outcome. *The American Journal of Psychiatry*, 169, 916-925.
- Pietromonaco, P. R., & Barrett, L. F. (1997). Working models of attachment and daily social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73(6), 1409-1423.
- Prunas, A., Di Pierro, R., Huemer, J., & Tagini, A. (2019). Defense Mechanisms, Remembered Parental Caregiving, and Adult Attachment Style. *Psychoanalytic psychology*, 36(1), 64-72.
- 蓮花のぞみ (2008). 青年期と成人期における愛着スタイルと防衛スタイルの関連性 生老病死の行動科学, 13, 3-13.
- Rholes, W. S., & Simpson, J. A. (Eds.) (2004). *Adult attachment:*

- Theory, research, and clinical implications*. New York: Guilford Press. (ロールズ, W.S.・シンプソン, J.A. 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳) (2008). 成人のアタッチメントー理論・研究・臨床ー 北大路書房)
- Schottenbauer, M. A., Glass, C. R., Arnkoff, D. B., & Gray, S. H. (2008). Contributions of psychodynamic approaches to treatment of PTSD and trauma: A review of the empirical treatment and psychopathology literature. *Psychiatry-interpersonal and biological processes*, 71, 13-34.
- Sifneos, P. E. (1973). The prevalence of 'alexithymic' characteristics in psychosomatic patients. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 22(2), 255-262.
- Steiger, H., Van der Feen, J., Goldstein, C., & Leichner, P. (1989). Defense styles and parental bonding in eating-disordered women. *International journal of eating disorders*, 8, 131-140.
- Talia, A., Miller-Bottomo, M., & Daniel, S. I. F. (2017). Assessing attachment in psychotherapy: Validation of the patient attachment coding system (PACS). *Clinical Psychology & Psychotherapy*, 24(1), 149-161.
- Tanzilli, A., Di Giuseppe, M., Giovanardi, G., Boldrini, T., Caviglia, G., Conversano, C., & Lingiardi, V. (2021). Mentalization, attachment, and defense mechanisms: A psychodynamic diagnostic manual-2-oriented empirical investigation. *Research in psychotherapy-psychopathology process and outcome*, 24, 31-41.
- Taylor, G. J. & Bagby, R. M. (2013). Psychoanalysis and empirical research: The example of alexithymia. *Journal of the american psychoanalytic association*, 61, 99-133.
- Thompson, P. M., Glasø, L., & Matthiesen, S. B. (2018). The way I see you implicit followership theories explored through the lens of attachment. *The Psychologist-Manager Journal*, 21(2), 85-105.
- Tmej, A., Fischer-Kern, M., Doering, S., Hörz-Sagstetter, S., Rentrop, M., & Bucheim, A. (2021). Borderline patients before and after one year of transference-focused psychotherapy (TFP): A detailed analysis of change of attachment representations. *Psychoanalytic Psychology*, 38(1), 12-21.
- 津山雄亮・中村延江 (2012). 一般大学生におけるアレキシサイミア傾向者の愛着と防衛機制について 心理学研究：健康心理学専攻・臨床心理学専攻, 2, 1-9.
- Vaillant, G. E. (1992). *Ego mechanisms of defense: A guide for clinicians and researchers*. Washington DC: American Psychiatric Press.
- Vaillant, G. E. (1994). Ego mechanisms of Defense and Personality Psychopathology. *Journal of abnormal psychology*, 103(1), 44-50.
- Weinberger, D. A. (1998). Defenses, personality structure, and development: Integrating psychodynamic theory into a typological approach to personality. *Journal of personality*, 66, 1061-1080.

(指導教員 遠藤利彦教授)